

---

# 弱さの果て 四人の過去

リン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

弱さの果て 四人の過去

### 【Nコード】

N5467T

### 【作者名】

リン

### 【あらすじ】

【弱さの果て】の主人公達は、過去に何を背負っているのか。現在の彼らをかたち作る背景の一部。一部ではありながら、そこには大きな想いが溢れ、心の奥底を決定付ける瞬間だったのかも知れない。

本編より重い物語もあります。また、本編と違い、主題は恋愛ではありません。

## 変わらない日々(前書き)

この物語は【弱さの果て】の主人公達の過去に当たります。併せてお読み頂くと、より愉しんで頂けるかと思えます。

なお、こちらの物語には、主人公本人の名前は登場致しません。敢えて、サブタイトルからでもはずしております。本編を読まれた方にはわかるよう描いたつもりですので、それぞれの主人公の深層に触れて頂ければ幸いです。

## 変わらない日々

毎日、同じ日々が続いている。

空は灰色に染まり、昨日までの夏の日差しは勢いを弱めているけれど、高い湿度のせいで気持ち悪い。肌に張り付くような生温い空気が重たい。じわりと染みる汗が、服も肌に張り付ける。

通い慣れた道の人通りは、大して多くない。小学生とはいえ、五年生にもなれば帰りは夕方近くなる日もある。それでも、買い物に自転車で出かけるヒトにも、公園で遊ぶ子どもたちの声にも、悪戯をするようなヒトにも、滅多に出会わない。

大して長くない道のりを、長めの時間をかけて歩く。無駄なことだとはわかっていても、それは私に染み付いたもの。クラブ活動をして、委員会活動をして、児童会役員活動をして。それでも、午後六時を回ることはない。門限は六時。いつも通り、五分前には玄関に辿り着く。

鍵を開けて家に入ると、奥から父が出て来た。笑顔で迎える父に私も笑顔で応える。いつも通りに玄関の鍵を閉め、部屋へと入る。もうすぐ六時。トイレに行くと、いつも通り、父が待っていた。

食事、睡眠、排泄。規則正しい生活は大切で、それぞれ正しい方法で行う必要があるらしい。昔から、散々父から教わってきた。今では質問などしない。父の教えは絶対で、そこからはずれたら私か母の傷が増えるだけだから。

下着を下ろし、父の指が私の排泄を手伝う。

私はバカじゃない。こんなやり方がおかしいことは二年生の頃から解ってる。三年生の頃に尿じゃないものが父の手を濡らした時は、ものすごく嬉しそうに笑って私を見た。それ以来、父の手を濡らさない私の排泄は終わらない。

私はバカじゃない。今ではすぐに父の手から、まるで水道で洗っ

た後のように雫が滴り落ちる。立っていることが辛くて震える私の脚を見て、あの日から変わらないうつもの父の笑顔が、また私を見る。

食事は私が作る。母は父に負わされた怪我がひどくて今は入院してるから、そうなってるからは私が朝昼晩の用意をしてる。門限外では買い物に行かせてもらえないから、食材は父が買って来る。私が学校に行っている間に。

私が家にいる時間の中に、父が家にいない時間は、無い。理科の先生に毒物の作り方を聞いたり、自分でも調べてみたけれど、入れる機会が無い。食事を作っている間はずっと見られてる。一度下剤を試した時は、味噌汁を入れた汁椀を取り替えると言われてひどい目に遭った。

父には隙が無い。外向きの評判も良く、入院している妻を支え、働きながら娘の面倒も見ていることになってる。どうやってるのかはわからないけど、とにかく頭の良いヒトで、私が何をしようとしても敵わない。

七時には配膳も済ませ、食べられる状態を完成させる。笑顔の父を前に、湯気を上げている夕食。すごくおいしそう。私はいつも通り、味の無いご飯を食べて、栄養を摂取する。父と同じタイミンで食べ終え、食器を全て洗い終えれば八時前になる。

八時には入浴。でも、シャワーを浴びるだけで湯船には浸からないし、湯も張らない。

垢すりは肌に良くないらしく、私の全身を撫でるように、父が素手で洗う。

私は無駄なことはしない。気持ち悪くて、夜中に洗い直してた頃は、朝起きられなくて叩かれることが多かった。夜中でも、必ず見られてた。浴室へ入っていくのを止められはしないけど、どこで何をしてるのかは、常に見られてた。父に言われるがままにしてさえ

いれば、父が洗ったところをその場で洗い直しても何もされないのは、もう解ってる。

私は無駄なことはいらない。結局、父と同じ布団へ入れればまた汚れるのだから。

空は赤黒く染まり、昨日は見られなかったけど、夕焼けを思わせる。肌にはパジャマが張り付き、生温かった空気は鋭く尖ったみたい。

通い慣れた道には、人が溢れかえってる。直角に傾いた世界で、大人も子どもも何かを叫んでる。いつもとは違う家は、綺麗。

長めの時間をかけて歩いていた道を、車に乗せられて走る。外は見えないけど、行き先はわかっている。母と同じところ。もう、クラブ活動も、委員会活動も、児童会役員活動もしない。門限も無い。

完璧な父は、最期まで完璧だった。父から煙草を奪って唇を重ね、床に落としたまま放っておいたのは私だけど、表向きには、そんなことはあるはずがない。故意じゃなく、過失。父が、すっかり、落としたの。父は私を押し退けて玄関へ向かったまま、帰って来たのは叫び声だけ。そのまま二人とも逃げ遅れるはずだったのに、私だけが今、家の中にいない。

完璧な父は、最期まで完璧だった。やっぱり、私は何をしても敵わない。窓からヒトが来るってわかっていたら、私も玄関へ行ったのに。

私を利用するヒトは、もう、いない。今度は私が利用する側に回るだけ。

私はバカじゃない。もう、普通じゃないことはわかっている。普通に戻れないこともわかっている。いつか、私の思惑を全て越えた誰かに、殺して欲しい。

私は、父に敵わない。生まれてから十年かけて私の中に入り込んだ父ごと、誰か、私を殺して。

毎日、同じ日々が続いてゆく。

## 本当の楽しさ

天才ってそんないいもんかな。俺は昔から損ばっかしてる気がするんだけど。

教室に入ると、いつもの奴らが寄って来る。よくわからないことを軽く話すだけなんだけど、何か面白いんだよな。何を話してたか忘れる程度の内容だから、内容なんてどうでもいいんだよな、きつと。

窓の外は荒れてる。グラウンドの隅に並んでる木は、門に向かって走ってるみたいに枝葉がなびいてる。今日は寒そうだな。

誘われたまま何となくサッカー部入ったけど、室内でできるバスケットにしておけば良かったかな。この中学に転校してきた頃はそうでもなかったけど、体育の授業でバスケットやってからは結構誘われたしなあ。そろそろ大会に出てみたいから、ここで落ち着いてくれねえかな。冬に転校すると、時期が悪ければ来年も出られなくなるかも知れないし、そうだったら一回も大会に出ないまま受験になっちゃう。それはいくら何でもつまらん青春だろ。頼むぜ、親父。

強烈な向かい風の中で紅白戦。今日の部活は、予想通り寒い。

相手の動きは何となくわかるから、スペースを狙ってパスを出す。シュートコースが開いていることも多いけど、あまり俺がシュートばかりしているとチームワークがどうのってなるのはわかってる。点を取るより、楽しまなきゃ損だぜ。

でも、みんな、なかなか思うように動いてくれないんだよな。あそこが開いているのに。そこでパスは読まれてるぜ。逆サイドで上がってる奴がいるぞ。そこに固まるとあっちがから空きに 点取られたか。取り返さないと。パスコースが開くのを読んで、切り込む。いいパスだ！ けど、今日の風でそれは追いつけねえって。何

とか脚に当てて、態勢を立て直してシユートを決めた。ああ、この瞬間は本当に楽しいんだよなあ。

くそっ、またか。慣れてるけど、面倒臭いんだよなあ。

いつもなら、あのパスはノートラップでシユートしてたのは俺だっただけだ。調子なんか悪くねえって。ただ向かい風が強かっただけだ。今日は四アシスト、三得点しかって言うけど、勝ったんだから少しくらい褒めてくれよ。何で俺がやると「三得点しか」で、他の奴がやると「三得点も」なんだよ。

本気でもできねえし、手抜きもできねえなんて、どうすりゃいいのかわせてくれよ。あーあ。こんな風に冷やかしかし食らうと、冷めるとだよ。練習もしないで何でもできてずるって言うけど、部活はちゃんと出てるし、お前らも部活以外で練習なんかしてねえだろ。またやってる。すごいよな、あいつ。クラス違うしまだ名前覚えてないけど、シユウとか呼ばれてたかな。いつも部活終わった後は、個人練習してる。他にも一緒にやる奴はいるけど、毎日続けてやってるのはあいつだけ。ああやって、特に一生懸命やってる奴らは、俺にごちゃごちゃ言ったことはないし、特別扱いはないから一緒にいて楽なんだよな。こいつらも見習えばいいのに。って俺もかな。

学校行く気もなくなるくらい、朝から真っ暗だな。雨は降ってないのに、雷が鳴ってるよ。大丈夫か、これ。今日はテストが返ってくるんだよな。帰って来たらウチもこんな天気になったりして。

リビングに行くと、トーストが湯気を上げてた。出来立てほやほやだな。この、上に乗せた目玉焼きがはみ出さないように、二つ折りにして食べるのがいいんだよと……げ。茶色の淵が上から見えてる……あ！横から黄身がこぼれてるし。今日は半熟だったのか、くそっ。失敗したぜ。今朝はこれを話題にしよう。

教室に入ると、いつもの奴らが寄って来る。トーストの話をする前にテストの話になった。そういえば今日返ってくるんだよな。だけど、今更そんなに心配したってどうせ結果は変わらないのに、何でみんなこんなにテストで盛り上がるんだ。点数悪くて困るなら、テスト前に頑張っておけよ。俺は別に点数にこだわりがないし、面倒だから授業以外で勉強なんかしないけど。

今日はみんなテンション高いなあ。テストのこともあるけど、雷が鳴るたびに女子が騒いでる。雷よりうるさいんじゃないのか。まあ、女子ってそんなもんだよな。先生も雷を話題にしてるくらいだし、この時間はテスト返して終わりだな。

国語、八十点。社会、三十点。数学、九十五点。理科、七十五点。英語、六十点。いつも通り。先生のお言葉もいつも通り。やればできるんだから、もっと頑張れってか。やればできるって言うけど、やれないからできないんだろ、みんな。本当にやる気ある奴はちゃんと結果出してるはずだし。俺は天才だの何だの言われるけど、こんなもん。結局、勉強でもスポーツでも、何もしないで最初からできる奴なんていないって。

俺は、要領がいいだけ。授業聞いてた分がそのまま点数になったんだ。学校でも塾でも家でも勉強してて、点数が取れないなんて言ってる奴は、全部集中してないだけだろ。時間ばかりかかってもつたいないと思うんだけどな。まあ、社会は時間かけて暗記すれば、すぐ満点取れそうだけど。暗記は面白くないから嫌いなんだよなあ。

結局、雨は降らないまま雷も鳴き止んだから、グラウンドは無事。風もほとんどなく、少し晴れ間が覗いてあったかい、絶好のサッカー日和だ。別に、快晴じゃなくていい。

今日も紅白戦ができる。最近、動きのいい奴が増えてきてる。個人練習をやってる連中だな。ちよっと勝負したいな。たまにはドリブルで切り込んだって罰は当たらんたる。勝負だ！ えっと……シ

ユウだったか。

お。圧力が違うな。パスコースもいいところは塞いでやがる。地味に見えるけど、いい動きだ。とりあえずフェイントをかけて……おいつ。何でそこに脚が出てくるんだよ。くそつ、取られちまったじゃねえか。絶対また、あいつらがうるせえよ。面倒だな。けど、俺も取られて終わりじゃねえぜ。って、もうパス出すのかよ。くそつ、次にボール持ったら絶対奪ってやるぜ。

サッカーってこんなに面白かったのか。あいつ、友達になりたいな。試合終わったら声かけよう。

## 赦さない

両腕をそれぞれ掴まれている。集荷場の中だから、声が響き渡る。本来の目的でここが使われることは滅多に無いから、こついうのはうってつけな訳か。

俺が黙っていると、正面の奴が胸を殴ってくる。少し息が詰まっただくらいで、大して痛みは無い。こんなことをされる筋合いは無いが、理由は想像できる。受け入れる気にならないから、正面の奴を蹴り飛ばしてやった。そいつが泣き出したのを見て、腕を掴んでいた二人が逃げようとした。とりあえず、まだ近かった左の奴の服を掴んで、引っ張った。背が低い上に怯えているせいか、余計小さく見える。学年でも一、二を争うくらい背の高い俺が怖いのかも知れない。

一応、何でこんなことをしたのか聞いてみたが、想像通りだった。こいつらはクラスでも有名な不良グループで、クラス内には苛められているヒトもいるらしい。俺が無視していたのが気に入らなかつたらしく、言うことを聞かせようと思ったと。じき中学生になるのに、下らない連中だ。

元々、喧嘩なんかするつもりは無い。やられた分をやり返しただけ。右腕を掴んでいた奴は大きな扉を必死で開けて逃げて行ったが、どうでもいい。それ以上無駄な会話もせず、怯える奴と、泣いている奴を残して帰った。

不良グループが俺を構うことは無くなったが、隣の席のコが苛められているらしい。理由はわからないが、そのコから相談を受けた。隣の席だからだろう。とりあえず、俺は現場を見ていないし、先生に相談してみるように話した。

直後の授業が道徳に変更された。内容からして、隣のコが先生に相談したのはすぐにわかった。当の本人は、俯いたまま、スカート

の裾を握り締めている。その拳に、雫が落ちる。不良グループの、あの時正面にいたリーダーっぽい奴が隣のコを睨みつけている。この授業は意味があるのか？ 名前こそ出さないが、関係者には丸わかりだ。

苛めは情けないことで、してはならない。見たりされたりしたら先生に相談すること、と結論付けられて授業は終わった。わざわざ言われなくても、そんなこと皆わかっているだろう。何の為の授業だったんだ。隣のコも、不良グループも、これでは何も変わらないいや、状況は悪くなるか。

隣のコが俺に見せたノートは、汚い字でバカだのウザイだの、そんなもので埋め尽くされていた。今日の放課後に、集荷場に呼び出されたらしい。男子が三人も寄ってたかって、女子一人に何を考えてるんだ。

怖いから一緒に来て欲しいと、遠慮がちに言う。元々、先生に相談してみろなんて俺が言ったからこんなことになったんだ。放つてはおけない。一緒に行くと約束すると、本当に安心した表情を見せてくれた。

女子と二人で歩くなんて、幼馴染のアヤ以外では初めてだ。小柄なコで、俺の肩よりも頭が下にある。綺麗な長髪が似合っている。他愛も無いことを話す時に、俺を見上げる仕草が可愛らしいと思っただ。いつもは椅子に座っていたから、視線は大して変わらなくて感じなかった。

こんな風に頼られていると、護りたくなる。アヤもそうだったな。いつも俺の周りにくっついて、よく泣いていた。最近は少し距離があるが、思春期の男女なんてそんなもんだろう。

周りの家より少し飛び出た、平らな屋根が見えて来た。集荷場の前はそれなりに広い駐車場になっていて、子どもの遊び場になっている。今日は空模様が怪しく、遊んでいる姿は無い。

壊れた南京錠のぶら下がった大きな扉を、体重を乗せて開けてい

く。錆び付いた金属の妙な音が響き渡り、集荷場の中の闇を中央から切り裂いていく。奥の方に、不良グループの姿が見えた。俺が先に立って歩いて行くと、後ろで扉が閉められた。誰かが電気を点けた。入口付近に、五人いる。その内の一人は隣の席のコで、喚いている。

嵌められた。俺を連れて来ることを条件に、あのコは苛めから抜ける予定だったらしい。そんな約束をこいつらが護る訳ないだろう。あの四人は中学生か。そういえば、リーダーっぽい奴は兄貴が暴走族に入ってるとか言ってたな。あのコだけでも何とか逃がしたいが……あまりにも分が悪過ぎる。

力があの時の比じゃない。あの時と同じように両腕を掴まれ、正面に一人。もう一人はあのコの腕を掴んで、不良グループの奴らと一緒に、にやにや笑って俺を見ている。

思わず呻き、直後に噎せ返る。腹に思い切り拳が突き刺さった。少し視界が歪む。同じところにもう一撃。脚の力が抜け、両側にいる奴に体重を預けてしまう。正面の奴の指示で両腕を放されると、俺は膝から崩れ落ち、頬が地面を擦った。咳き込んでいる俺の髪を引っ張り上げ、正面の奴は土下座を強要した。俺が黙っていると、頭が地面に落ちた。砂利の味がする。霞む視界の隅で腹に向かう脚を見つけ、咄嗟に腕で庇った。地面を横向きに転がったのは初めてだ。悲鳴を聞いたのも初めてだ。泣いているみたいだな。

俺が、ちゃんと聞いていれば。最初から先生なんか頼らずに、俺が関わっていれば。あのコはこんなところに来なくて済んだ。あのコだけは、何とかしなければ。それが俺の責任だ。

あのコに目をやると、いつの間にか六人に囲まれている。俺の方には暴走族が一人、か。服を脱げとか言われている。泣きながら、怒鳴られるたびに身体をびくつと震わせている。こいつら、どこまで腐っているんだ。あんなに怯えているコを囲んで、裸にするのを楽しんでる。

震える腕を踏ん張らせて身体を起こした俺の言葉に、一瞬の沈黙を返し、すぐに七人の笑い声が響き渡る。正座したまま頭を上げようとすると、後頭部を踏みつけられた。額が地面にぶつかり、意識が揺れる。

周りに奴らが集まって来た気配がする。頭を踏みつけていた脚の感覚が消え、顔を上げると目の前にそれはあつた。笑いながら、舐めろと一言。彼女には手を出さないで下さいともう一度呟き、今度は自分から砂利の味に触れる。

大笑いとよくわからない言葉を置いて、奴らは集荷場を出て行った。朦朧とした意識が雨音に呼ばれた時には、集荷場には俺しかいなかった。

俺は、絶対に赦さない。この味を、絶対に忘れない。人任せにしようとした弱さも、自分の責任を果たす力すら無かった弱さも、誇りを護れなかった弱さも、全てが憎い。必ず、俺の期待に応えさせてやる。必要な時に、必要なものを護れる強さを、絶対に身に着けさせてやる。

俺は、絶対に俺を赦さない。

そうなんだって

シユウ君はすごい。虫カゴに入ったバツタはこれで八匹。アタシがやっても、みんな逃げられちゃう。アタシが虫網でやってもできないのに、シユウ君は手でどんどんつかまえる。

わっ。あれカマキリだ。カッコイイな。つかまえたいけど、怖い。シユウ君にお願いしたら、簡単につかまえてくれた。アタシにも持つてみるって言ってくれたけど、怖くてできなかった。カマを振り上げて、怒ってるみたいだったんだもん。

学校で友達が、習字の話をしてくれた。すごく面白そうだったから、アタシもやりたい。

お父さんに話したら、どうせすぐに飽きるからやめておけって言われた。そうかな。漢字練習帳もあまり使ってないし、そうかも知れない。塗り絵はいっぱいやったけど。

お母さんに話したら、まず宿題をちゃんとやりなさいって言われた。だってシユウ君と遊んでる方が面白いんだもん。

シユウ君はすごい。いつもアタシと遊んでるのに、宿題はちゃんとやってくる。アタシはいつもやってない。面白くないし、何を書けばいいのかよくわかんない。指が足りなくなると計算はよくわかんないし、日記はもつとわかんない。

先生に聞いたたら、その日にあったことを書くんだよって言われた。だから、シユウ君と遊んだって書いたら、お母さんにそんなの日記じゃないよって言われた。よくわかんない。

シユウ君に聞いたたら、一緒にやるうって言うてくれた。それだったら楽しいかも。シユウ君は優しいな。

お母さんとシユウ君のお母さんが話してる。難しいことはよくわ

かんないけど、シユウ君はよくできる子だって。何ができるんだろ  
う。でも、シユウ君は何でもできるよね。アタシは素直ないい子だ  
って。褒められて嬉しいけど、お母さんは、そんなことないって。  
何をやってもダメだって。そうかも知れない。アタシは宿題もよく  
わかんないし、鉄棒や縄跳びもシユウ君みたいに上手にできない。

シユウ君はすごい。一緒に宿題やったら、簡単に終わった。日記  
もちよっとわかった。何をして遊んだとか、どう思ったとか、そう  
いうことを書くんだって教えてくれた。今日は、シユウ君とかくれ  
んぼして楽しかったことと、一緒に宿題してくれてありがとうって  
思ったことを書いた。今度は、算数も教えて欲しいな。また、一緒  
に宿題してっってお願ひしたら、いつでもいいよって言うてくれた。

国語のテストをお父さんに見せたら、笑ってた。お母さんに見せ  
ても、笑ってた。シユウ君に見せたら、すごいって褒めてくれた。  
全部バツだったのに。シユウ君は全部マルだったのに。何がすごい  
のって聞いたら、僕はこんなこと思いつかなかったって。アタシは  
これしか思いつかなかったけど。

シユウ君のと比べてみたら、ちよつとだけわかった。上の反対の  
言葉は、「下」なんだ。アタシは「えう」って書いた。大きいって  
書いてあるボールの横に、もう一つボールがあったのは、「小さい」  
がマルなんだ。アタシは「大きくない」って書いた。褒めてくれた  
のは、シユウ君だけ。シユウ君大好き。

シユウ君はすごい。指を使わなくても、計算ができる。アタシが  
指を数えている間に、頭の中で計算しちゃう。指より多くなったら  
どうすればいいのかが聞いたら、一回十を作って、残りを数えるんだ  
って。すごいよ。アタシでも計算できるようになったよ。宿題が楽  
しくなっちゃった。これからもいっぱい教えて欲しいな。

お父さんとお母さんがチユウしてた。アタシは誰とするのって聞いたら、好きなヒトとするんだって。お父さんもお母さんも好きだよって言ったら、ほっぺにチユウしてくれた。口にはしないのって聞いたら、一番好きなヒトとするんだって。お父さんはお母さんが一番好きで、お母さんはお父さんが一番好き。アタシはシユウ君とするんだ。

シユウ君に言ったら、ダメだって。アタシのこと一番好きじゃないのって聞いたら、恥ずかしそうに、一番好きって言ってくれた。すごく嬉しい。じゃあ、何でチユウはしないのって聞いたら、チユウは大事なんだって。結婚するヒトとしかしちやいけないから、それまで取っておかなくちゃダメなんだって。アタシはシユウ君と結婚するからいいのに。でも、シユウ君は、運命のヒトがいるかも知れないって。運命っていうのはよくわかんないけど、最初から決まってるんだって。そのヒトがいたら、僕とは結婚できないからチユウはダメなんだって。シユウ君が言うなら、そうなのかな。内緒でチユウしよって言ったら、怒られちゃった。僕だっけしたいけど、我慢してるんだって。

そっか。最初から決まってるなら、諦めなくちゃいけないんだ。我慢しなくちゃいけないんだ。

シユウ君が運命のヒトだといいな。何をやってもダメなアタシでも、シユウ君がいてくれたら、大丈夫だもん。アタシの運命、ダメじゃないといいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5467t/>

---

弱さの果て 四人の過去

2011年5月29日02時34分発行